

「系図」、織田後代記目録其他調書 酒井史郎宅(下小口)に多くの古文書が保存されているが、この中に見出しの古文書がある。

この中で、「大久地城家中調」の項は、城がその勢力を誇った頃の家臣の持高、地位、その家臣の江戸期における未孫の氏名などがこまかく記載され、その偉容とそして戦国興亡の波の中に、廢城となり家臣がそれぞれ諸国に流れていく中で、多くはこの地にとどまり現在の大口町民の祖先となっていることが容易に考察できる。

この他、下小口地内に祀られていた愛宕大権現、白山大権現の由来もみえる。

大久地城史記 大久地城史記なる古文書(写本)が町内に現存するが、これには築城の経緯、歴代城主の保城史記、織田氏の系譜がこまかく記述され、城の栄枯盛衰もこまかく記述されているが、その史料価値については、今後の研究を待たねばならない。

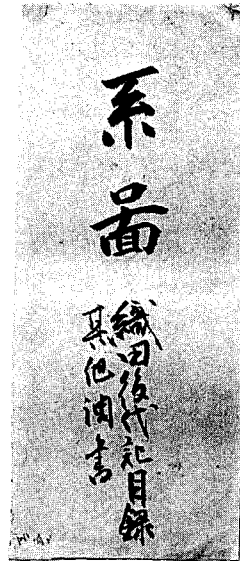


図4-43 「系図」織田後代記目録(酒井史郎氏蔵)

第五章 人物

郷土大口の発展につくした人、またそれぞれの分野において顕著な業績をあげ、本町の誇りとなる人は多くある。

そのうち、この地に住み、また、多くの人々の記憶にのこる人物と遺業のあらましをしるす。

なお現存の人々については、この編ではとりあげないこととした。

織田広近	堀尾吉晴	仙田半耕
酒井椿溪	花橋春溪	田山地久七
酒井覚朗	丹羽伊三郎	野田正昇
杜本仁左エ門	赤堀禪稻	

織田広近

幼名を与十郎郷近といい、織田郷広の子、岩倉城主敏広の弟で、天正の乱において武功を樹てる前、長祿三年（一四五九）に丹羽郡小口村（現在の大口町小口）に築城をはじめ、翌寛正元年に入城し、この城を

箭筈城と名づけた。城郭を整えて尾張北部の守りを固めるとともに、美濃より尾張への勢力侵攻にそなえ、この勢いが激しくなるにつれ、尾張、美濃の国境である犬山郷木ノ下村（現在の犬山市木の下）に城を構え、これに対した。

（築城は文明元年（一四六九）といわれている。）

こうして広近は近郷においてその力を發揮したのち、臨濟宗の高僧悟溪禪師を招いて城下（現在の余野地内）に徳林寺を創建し、その後城郭の近くに万好軒と称する隠邸をたてて、余生を送ったと伝えられている。

徳林寺に現存する棟札には、

「尾陽国大久地城主、織田遠江守広近開基、文明元年 二月吉祥日」

とあり、また万好軒は文明七年三月の創建とされている。

この万好軒は後、明応元年（一四九二）、織田伊勢守敏定が、広近公の遺命を請け、「吉祥山妙徳寺」と名を改めた。したがって現在同寺の庫裡の一部は、万好軒の遺構ともいわれている。

なお広近は延徳三年（一四九二）九月に没し、妙徳寺境内の「磨山（丸山）」に葬られた。法名「珍岳常宝庵主」そして現在、妙徳寺境内の墓地には、宝篋印塔が建っている。

堀尾吉晴 吉晴は尾張の国丹羽郡御供所村（現大口町豊田地内）に生まれ、幼名を仁王丸のち小太郎といい、長じて茂助と改めた。

戦国の乱世、幾多の武功をたて従五位下に叙せられるとともに帯刀に任じ、豊臣の姓を称することを許された。はじめ岩倉城主織田信安に属していたが、吉晴一六歳で初陣し、永禄元年（一五五八）織田信長に仕えたが、のち信長の命をうけ豊臣秀吉に属するところとなった。

元亀元年（一五七〇）、浅井長政拳兵の報を岐阜城の信長のもとへいちちはやく伝え、浅井氏のおちる天正元年（一五七三）、はじめて秀吉からその功を以って、浅井氏の故地一五〇石を与えられた。ついで天正三年（一五七五）長篠の戦いに加わり、重ねて功あり、天正五年（一五七七）一、五〇〇石に増された。

天正八年（一五八〇）、播州三木城攻めで先峰として活躍し、また天正一〇年（一五八二）、秀吉が備中高松城（現在岡山県高梁市）を攻落した時、城中検使を務めた。ついで山崎の戦いの後、九、七八四石に増された。

天正十一年(一五八三)、賤ヶ岳の戦いの武功は顕著で、これが認められ若狭小浜(現在福井県小浜市)一万七、〇〇〇石の城主となった。

○石の城主となった。
 ついで天正二十二年(一五八四)、小牧・長久手の戦いに従軍し、翌年四万石の城主として近江佐和山(現在滋賀県彦根市)に移った。

天正十五年(一五八七)九州平定、天正十八年(一五九〇)小田原征討に加わり、遠江浜松(現在静岡県浜松市)一二万石の城主となり、ついで関ヶ原の役ののち、松江で二三万石を領し松江城主となり、名声を誇った。文禄年間に豊臣家三中老の一人となったが、秀吉の死後、浜松を子、忠氏にゆずり、隠居料として越前府中(現在福井県武生市)に五万石を与えられた。

慶長九年(一六〇四)従四位下に任ぜられ、同一六年(一六一一)六月、六九歳で没した。

仙田半耕
 嘉永二年(一八四九)二月、当時の名古屋区赤塚町に生まれ、本名を裁、号を半耕と称した。安政六年(一八五九)ごろ幼くして東春日井郡の名刹、定光寺に入って弟子となり、大いに修業を重ねたが、明治維新

の後、還俗し小学校の教員になった。

明治三年、その才能が認められ、丹羽郡集会所(後の郡役所)の書記として登用され、その力を大いに發揮した。

この頃趣味として日本画を描いて余暇をすごした。明治六年九月、二六歳の時、丹羽郡富成村河北六七番戸(現在の大口町河北)の仙田善之工門の長女いわと結ばれ入籍、仙田姓となった。

書画は独修であったが後、犬山の村瀬太乙の薰陶をうけ晩年京都の秦金石に師事し本格的に学んだといわれておりその画には天才的な閃きがあると称賛され、ことに山水画はもつとも好評をえ、居住地であった河北は勿論、近郷に



躑躅影横斜暗香浮動

癸丑秋日

半耕老生

對石山人

多くの作品を残している。右の画軸は大正二年、半耕(書)・對石(画)による合作であり、對石は半耕の弟である。また氏は漢詩にも堪能であったが、大正九年、七十二歳で不帰の人となった。

酒井椿溪

嘉永四年(一八五二)十一月、小口村下組(現在の大口町下小口)の庄屋、市郎右衛門の長男として生まれ、名を惟一とよんだ。苗字・帯刀の許された酒井家の嗣子として、学問を修めるかたわら画業に志しのち「酒井椿溪」の画号をもって衆目をあつめた。

ことに花鳥・山水の絵には、氏の恵まれた資質がよく表現され、秀れた作品となり濃尾の画界に名が高かった。しかし、氏は生活の糧として画筆をふるうことなく、自己の画風研鑽につとめ、屋敷の一隅に画室「山茶花園」を設け

図4-44 画 軸



図4-45 酒井椿溪

多くの文人・画人を招き余技の俳句の吟作も合せて努力を重ねた。

のちに日本画壇の巨頭とよばれていた、京都の川端玉章の門に入り修業しその画風はますます円熟し、明治四三年に発行された画人番付表には、上位にその名をつらね、その達人ぶりがうかがわれる。

他方、郷土の発展にも大いに力をつくし、明治二五年には小口村村長、明治三六年郡会議員、明治三九年大口村第一次村会議員の要職についた。のち

大正一〇年三月、七二歳でその生涯を閉じた。

花橋春溪 河北村（現在大口町河北）の人、幼名を常三郎といい、文政六年（一八二四）生まれ、父を柳輔

といた。

幼少にして父を失い、叔父にあたる医師花橋深造のもとで育ち、一六歳で家をつぎ老祖母を養っていたが、のち志をたてて名古屋に出て漢籍を学び、数年後医学の修得を求め尾張藩医学館浅井正翼について学び、また脈法を河田寿庵に学び、その秘法をうけたといわれる。

一方、詩文・和歌にもすぐれ村瀬太乙・市岡和雄などの門に入るとともに絵画にもその才能をみせ、当時の画家小島老鉄等との親交を重ねた。

嘉永五年（一八五二）京都にて梁川星巖に学び、居ること一年にして家に帰り本来の医業に専念することになったが元来人に接することが下手な性分であり、あまり繁昌しなかつたと伝わる。

明治維新後において勤王志士と多く交わりがあり、明治四年戸籍法が發布されるや、丹羽・春日井両郡の戸籍簿を

整理し、また学制が發布されると隣村羽黒学校の教員となり、児童の教育にも力をつくした。

以来二、三の学校に奉職し、明治一六年五月羽黒学校在職中に病死した、六一歳であった。

田山地久七

嘉永三年(一八五〇)五月、小口村小口二九番戸(現在萩島)に生まれ、長じて農業に従事するかたわら、天性の美声を活かし、「木遣り歌」を趣味とし、この地方の木遣り歌を独特の節回しで完成し、一世を風靡した。

これが、近郷はいうまでもなく、遠く岐阜・三重県にまで知れわたり、寺社など大きな棟上げ式に招かれ、氏の美声により、多くの人々を魅了したとのことである。

さらに自ら多くの木遣り歌詞をつくり、郷土の後輩を指導した。

氏には「三度びつくり」のあだ名がある。

これはまずその美声、ついで氏の家が代々庄屋をつとめ広大な土地を有するとともに屋敷は堀に囲まれ城郭を思わせるような立派な建物であったこと、そして氏の顔が余りにも醜いこと(九歳の頃天然痘にかかったといわれる)、この三つのことを見聞した多くの人から、この通称がつけられたといわれる。

当時を偲ぶ氏の遺品として、明治三〇年頃に吹き込んだといわれるレコード(やや破損しているとか)や氏が作った原稿の多くが大切に保存されている。

野田正昇

明治九年一二月、大屋敷村本郷野田庄右工門の長男として生まれた。

幼時より学業にすぐれた才能を発揮し、村人の注目をあつめ早稲田大学に学びまず法学を修めた。

明治四五年三月、若冠三七歳で大口村長となり、村人をはじめ隣接町村においても有能な青年村長として、その政

治手腕が期待された。

村長の要職にあること三〇余年、この間四回県議会議員として県政につくし、二回県議会議長となり、ますます名声を県下にとどろかせた。

こうして昭和七年四月、村人はもとより県民の信頼と期待のうち、衆議院議員となり国政に参画するところとなつた。

昭和二年六月七一歳で死去されたのであるが、その政治力は今日の大口町建設の礎であり、まれにみる大政治家であつた。なかでも村政・県政につくされた功績は顕著であり、道路の整備など村人のもつとも感謝するものである。



図 4-46 野田正昇

このほか氏の功績は数限りない。

昭和八年五月大口第一尋常高等小学校（現在大口南小学校）の校庭に氏の偉大なる業績をたたえ銅像が建立されたが太平洋戦争中に取りはずされた。

戦後昭和二七年、本町中央公民館の前に銅像が再建され、町民の敬慕の的となつていたが、昭和五三年、本町伸展の中核として建設された総合福祉会館の広場の一角に移築され、本町の今後の発展を見守っている。

丹羽伊三郎

明治七年一月生まれ、豊田字御供所に居住し、慈悲心の厚かつた父伊七郎氏の教えをうけ、長じて人情すこぶる深い慈善家として、終始一貫、名利をすてて地域の発展に尽力、ことに社会教育・福祉事業に尽瘁されその人格・篤行は人々の敬服の的となり、社会の浄化の範であり、多年に亘る方面委員（民生委員）とし



図 4-47 丹羽伊三郎

ての功績は顕著であった。

なかでも家の中に小さな部屋をいくつも作り、当時この地方に多かつた朝鮮人を無料宿泊所として收容し、これらの人々と地域の人との融和をはかるとともに、貧困者の救済、村内の争いごとの解決に日夜努力されたことは、多くの人の知るところで、その公平無私な人柄、高い見識は、当町としてもまれにみる存在であった。

社本仁左衛門

明治一四年一〇月一八日、豊田字池尻一五の農家に生まれ、農業に従事するかたわら多くの公職に就きその高潔円満な人柄は地区民の信望を一身にあつめた。

とりわけ、氏は農業の振興に力を入れ、地主と小作者との紛争解決につくされたことは多くの人が知るところである。また大正九年四月、木津用水普通水利組合の治水委員に就いて以来二〇有余年、一貫して組合の発展に尽瘁され、つづいて本組合が昭和二六年一二月、木津用水土地改良区に改組されるや、初代理事長に就任し広範におよぶ農業用水事業をなすとげ、土地改良区の発展に寄与され、この功績は斯界において大きく評価された。



図 4-48 社本仁左衛門

他方、昭和一一年一二月創設された大口信用販賣購買組合の初代組合長として七年余その職務にあり、今日の大口町農業協同組合の基礎づくりに努力され、その功績は多大であり、広く地域住民の感謝しているところである。このように、一生を愛郷の精神で貫き、郷土の発展を願望しつづ昭和四五

年五月一日、九一歳の長寿を全うし逝去せられた。

酒井覚朗

文久元年五月二九日、地主酒井小吉の長男として、小口村下組(現小口字本郷五五番地)にて出生し、弱冠一七歳で学務委員となり長じて地方自治の改善進歩に意をつくした。

明治三九年施行された太田、小口、富成の三村および余野地区の合併による大口村の誕生には、その円満なる合併達成のため、誠実な人柄と実行力により、寝食を忘れて奔走し、幾多の問題解決にあたり、村民の願いに応え住民の信頼をますます高くした。



図4-49 酒井覚朗

明治四〇年一月大口村の初代村長に就任し、卓越した行政手腕を發揮し、今日の大口町発展の基礎をつくった。

また、氏は明治二三年小口村助役、三三年一〇月より三七年一〇月まで小口村村長を、四四年には郡会議員、大正九年には村議会議員を勤めるなど、永く地方自治の要職にたずさわり、地域の発展に貢献した。

他方、氏は農業は農楽と称し、畝先(常雇)をさけ、田植の方法や農繁期の食事の十分な栄養について指導したので、「喰い倒れ地主」の愛称があった。昭和九年六月、七四歳で他界された。

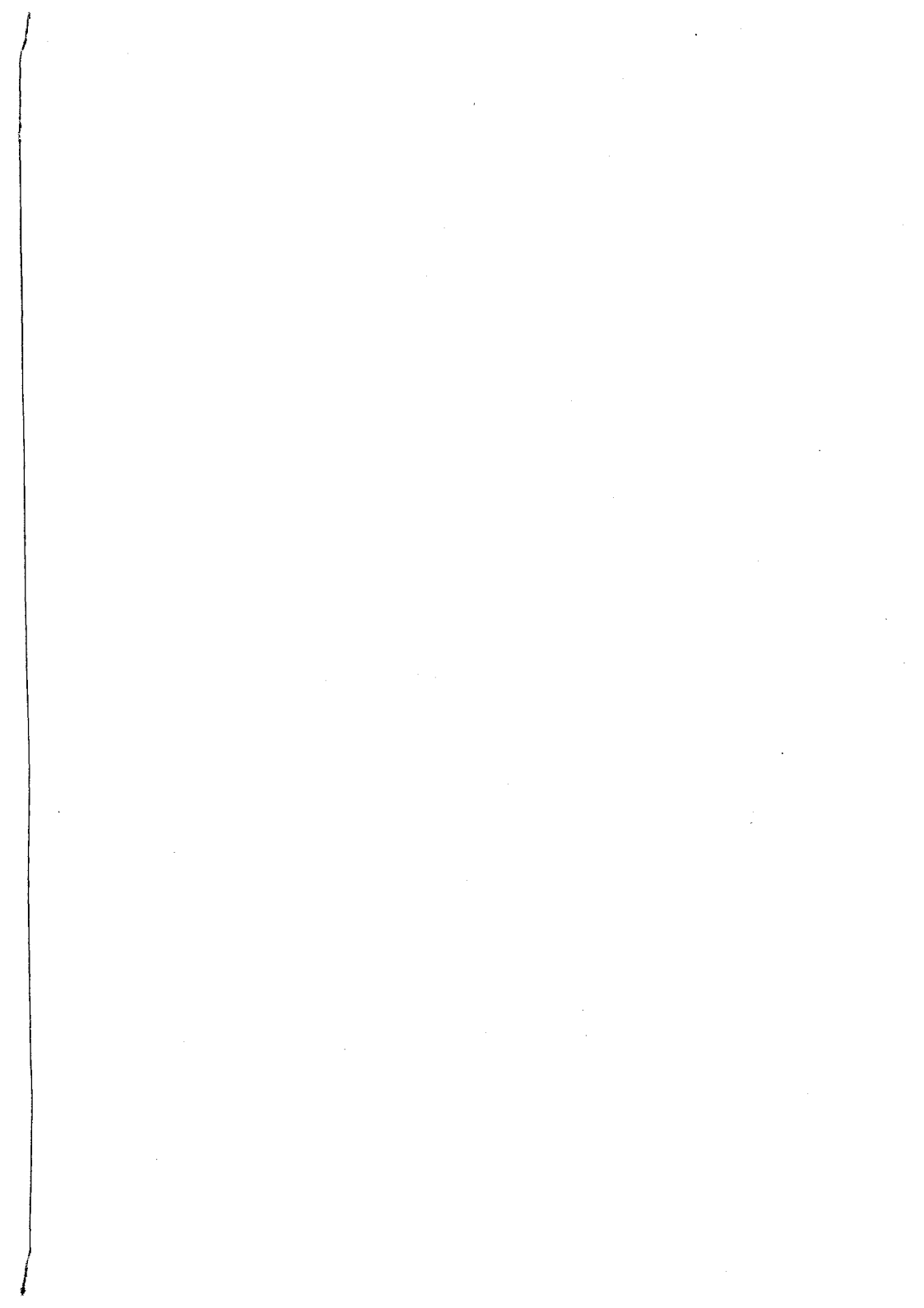
赤堀禪福

前桂林寺住職、赤堀禪福師は明治二四年九月一〇日、岩倉市野寄の地に生まれ九歳で桂林寺一四世森川祖水師のもとに入山した。

のち大本山永平寺に雲水修業をしたが、祖水師のすすめで画道を修め、森村宣福について土佐派を学んだ。その後山梨の少林寺の住職となったが、昭和一七年再び桂林寺に帰って住職となった。

昭和三九年一月三十一日、七一歳で示寂した。

禪稲師は宣稲の高弟として、禪宗界におけるすぐれた画人であり、曹洞宗大本山永平寺が高祖大師七百年忌を卜して、三間四面の永平寺全図を企画しこの製作を禪稲師に託した。師は三年半の歳月でこれを作製し不滅の偉業を遂げられたが、その間病身をおかして寒気、悪採光などの環境にたえ、完成ののち間もなく死去された。この何人もできない大事業に全力を傾注された師の不屈の精神は、いつまでも大きく評価されよう。



資料

